

究癌患者の子どもへのチャイルドサポート観察研究
研究分担者 田巻知宏 北海道大学病院 腫瘍センター講師

研究要旨

北海道大学病院では平成 23 年 4 月よりチャイルド・ライフ・スペシャリストが腫瘍センター緩和ケアチームに配属され、様々なチャイルドサポートを行なっている。その活動の中に子どもを持つがん患者をサポートするためのがんサロン「わかばカフェ」を開設しているが、同時にがんの親を持つ子供向けの企画「ことりカフェ」を企画し開催している。

A. 研究目的

がんの親を持つ子供向けのサポートの企画検討を行う。

B. 研究方法

小澤班のアンケートに協力していただいたがん患者さんとその子ども、当院のわかばカフェに参加されているがん患者さんとその子どもを対照に、ことりカフェ開催の案内を送付し、参加を募った。

<倫理面への配慮>

子どもへの侵襲的な介入は行わず、その場でのサポートを中心にいき、参加者名簿などは外部に持ち出さず、この研究終了後には処分する予定のため、倫理面としては問題ないと判断した。

C. 研究結果

平成 25 年度は 2 回のことりカフェを開催した。第 1 回目は 8 月 7 日の夏休みに開催し、6 名の子どもの参加があった。最初に親はがんという病気であること、癌は伝染らないこと、がんは誰のせいでもないことを CLS のリードで全員で確認した。この回はホスピタル・クラウンを招き、前半はワークショップで導入をはかり、後半は親も同席しながら工作（ピンをデコっちゃおう）を行った。ワークショップでの導入も効果があり、工

作にも真剣に取り組み、完成したびんを大切にそうに持ち帰る姿がみられた。

第 2 回めは冬休みの 1 月 15 日に開催し 7 名の参加があった。この回は今までが工作を行うことが多く変化に乏しいことの反省と少し語りの時間を持つようにとの計画で、対象年齢をやや高め（10 歳～18 歳）に設定し、ネイルアートを企画として募集した。前半はネイルアートをいき、参加者同志と一緒に取り組むことで気持ちのリラックスが得られ、後半は「がん、伝染らない、誰のせいでもない」のキーワードを元に、親の病気を知らされた時の気持ちについて話し合い、治療の副作用についてもともに話しあうことが出来た。感想としては、とても楽しく、また参加したいというものが多かった。

D. 考察

がんの親をもつ子どものサポートには個別サポートと集団サポートが存在する。集団サポートプログラムとしては CLIMB や、病院探検ツアーなど、工夫したプログラムをいき試行錯誤しつつ広がりつつあるのが現状である。

今回当院でも平成 24 年度の途中よりがんの親をもつ子ども向けのプログラムであることりカフェを開始した。子どもたちの参加できる時間帯は学校終了後もしくは学校のない時間帯となるため、当院で

は季節の休み期間（春休み、夏休み、冬休み）を利用した。夕方以降のプログラムも検討したが、夕食の問題や親の都合の問題を考慮し、かつ対応する職員が時間外勤務となることの難しさがあり、除外したが、今後は検討すべき問題と考えられた。

プログラムの内容も当初はストロングボックスなどを含めた工作と中心企画として行っていたが、同じ子どもの参加にとっては企画のバリエーションが必要であり、その一環としてネイルアートなどを企画した。子どもの年齢層、性別などに合わせた企画の検討が必要と考えられた。

また当院の方法ではプログラムとプログラムの開催の間隔が長いため、複数回に渡る連続したプログラムの実施は困難であることが実感され、その内容には更に検討と試行錯誤が必要であると実感された。

E. 結論

がんの親を持つ子ども向けのサポートプログラムは子どもたちの不安の軽減、医療者と共に歩む安心感を得られる貴重な体験となりうる。今後もその重要性は増すため、プログラムの内容や方法の検討と実践が必要である。

F. 研究発表

1. 論文発表

該当なし

2. 学会発表

該当なし

3. その他の発表

該当なし

G. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

該当なし